

◎小学生の部

その他の良い作品

サイクリング

新郷第二小学校 三年

新井 煌叶

水とうよし
おかしよし
あせふきタオルよし
ヘルメットよし
マスクよし
自てん車の空気よし
トイレ行った
ぼくがお父さんとサイクリングに行く時にか
くにんすることだ
「よし出発。」
ぼくはいつきにペダルをこぎ出す
大きな大きなお父さんのせ中の後にぼくは自
てん車をこぐ

お父さんの後ろがぼくのていいちだ
今日もあつい
ピカピカした太陽がぼくとお父さんにつこ
りわらいかける
ハンドルをにぎるうでがジリジリとやける感
じだ
ぼくは田んぼに水が入るきせつが一番すきだ
つめたい空気と温かい空気がこうごにほっぺ
たに当たる
とてもふしぎない気持ち
キヤツセに着いてヘルメットをはずすとあせ
がたれてきた
かみの毛がぺっちゃんこになっている
タオルもおもいつきりかみをふいた
「帰ったらひとつぶろあびよう。」
お父さんが言った
帰ったらおふろで水遊びだ
今日も明日もあさっても
あつい日はつづくけれど
楽しい楽しい夏休みもまだまだつづきそうだ
ぼくは太陽にまけないよう力強くペダルをこ
ぎはじめた

つながったいのちのバトン

羽生北小学校 二年

石田 心花

わたしのいえにはイヌのラモスがいます
まだ3か月になったばかりのイヌだ
ちや色でおなかのぶぶんだけ白い
トイプードルのオスだ
ラモスは今年の7月にやってきた
それはよていよりずっと早くやってきた
なぜなら先にかいはじめたネコのミルクが
とつぜんしんでしまっただからだ
ミルクはすてられていたネコで
ごえんがあつてうちにきた
毛がまっ白で目は青とみどりのオッドアイ
さいしよはにげまわっていたけれど
すぐになれてだっこをさせてくれたり
おもちゃでたくさんあそんだりした
わたしが大人になるまで長生きするといいな
そう思ってたのに
その日はとつぜんやってきた
ミルクが一ばんすきだったソファの下で
ミルクはとつぜんしんでしまった

ママがびよういんにつれていったけれど
そのまま空にとびたってしまった
かぞくみんながたくさんないた
ポツカリあながあくというのはこれだ
その日からママは元気がなくなってしまった
ミルクを火そうする日までずっとないていた
だが火そうしたちよくごきせきがおきた
いつかかうときめていた犬がみつかつたのだ
そのでん話から四日ごとにラモスはうちに来た
ママはさいしよとまどつていたけれど
だんだんえがおがふえて元気になつた
たまにはラモスはネコみたいになしぐさをする
さいしよにおぼえたげいはタツチだ
ミルクからバトンをもらつたのかな
それをわたしたちにりよう手をタツチする
いのちのバトンを
ありがとうミルクずっとわすれないよ
ミルクとラモスはずっとわたしかぞくだよ

あめのひ

新郷第一小学校

一年

石橋

侑芽

ぽちゃん
ちやぽん
ぽつぽつ
あめのひだけの
いけのおと

ぴかぴか
きらきら
まあい
あめのひだけの
くものす

あめのひの
がっこうたんけん

ナイトツアー

三田ヶ谷小学校 六年

木村 悠聖

「出発時間になりました。準備は良いですか。」

と母のちよつと不気味な声

夏休みに入ったある日

「ナイトツアーのご案内」

と書かれた紙が届いた

弟は大興奮でいつも以上に騒がしい

僕はうるさいなあと思いつつながら

当日までちよつぱりワクワクしていた

久しぶりに家族五人そろつてのぼうけん

通学路が街頭に照らされ

「ちよつぱり怖いね。」

「カブトムシ見つかるかな。」

「クワガタがいいな。」

など会話がはずむ

オレンジ色のまんまるお月様が

ぼく達を見つめている気がした

真っ暗でしずかな広い公園

たくさんの種類の木があり

どこにかくれているのかわからない

ドキドキ ワクワク

何分歩いただろうか

「いたー、カブトムシたくさん発見。」

見つけたしゅん間

うれしくて大声を出してしまった

みんなで大喜び

日中の公園とは違う楽しさがあった

「来て来て、セミが羽化しているところ。」

と父が教えてくれた

もごもごと動いて小さなカラから出てくる

姿に感動した

初めて見る光景を

しばらく観察し目に焼きつけた

近場で過ごす家族との夏の思い出

家の前にこんな素敵な場所があったとは

わが家の庭で宝さがし

須影小学校 四年

澤田 乙葉

あたたかい春がやってきた
「まっつていました。」
と アスパラガスのめが顔を出す
みょうがのめがツンツン
ふまないように気をつけて
いいかおりの赤ちゃん これほしそだ
たねを植える
きゅうり オクラ ゴーヤ
なえを植える
ねぎ なす ピーマン トマト
すいか カボチャ バジル
強い風に負けないようにし柱でささえる
ひ料と水をたっぷりあげる
太陽の光をあびてぐんぐん育つ
夏がやってきた
私の出番だ
大きなザルとはさみを持って外に出る
はじめはきゅうり
毎日とらないとすぐに大きなおぼけになっ

ちやう
次はなす
へたのとげに気をつけて
ピーマンは手でポキッとかんたんにとれる
んだ
トマトは真っ赤なやつ
大きな花がさいている下には これこれオ
クラ
かくれんぼ名人・・・みょうが
見つけるのがむずかしいんだ
お金のぼうみたいたいなゴーヤ
カボチャとすいかはなかなかしゅうかくで
きないんだ
気がつくともザルは野菜でいっばい
どれもとても新せんで美味しそう
畑は宝箱みたい
野菜はほう石だ

お父さんの仕事

羽生南小学校 三年

富田 芽吹

びょういんのおいはきらい
いろいな道具があるのはすき
せつし、モスキート、いろんな太さのはり、
太さのちがうちゅうしやき、たくさんの大き
なきかい

おじいさんやおばあさん、小さな子ども、い
ろんな人たちがやってくる
不安な顔、心ぱいそうな顔、ほっとした顔、
赤ちゃんのなき声
どうしてないているのかなって、わたしも心
ぱいになる

そんな時、お父さんの声が聞こえてくる
やさしいかんごしさんの声が聞こえてくる
その声を聞いて、わたしは安心する

人に親切にするっていいな

びょう気の人をなおしてあげるのってすごい
な
わたしもいつか
お父さんみたいないな
助ける人になりたい

おばあちゃんのすいか

三田ヶ谷小学校 四年

野中 遥斗

ぼくのひいおばあちゃんは九十七才だ
元気で毎日畑仕事をしている
毎年夏になるとすいかを育てる

おとし大切に育てたすいかをハクビシンに
食べられた
ひいおばあちゃんはとても悲しんでいた
でもよく年は花や実にかこいをつける工夫を
した
プラスチックで手作りした物をすいかにかぶ
せた
なんでも手作りしちゃうひいおばあちゃんは
すごい

ひいおばあちゃんは野菜や果物に愛じょうを
こめて育てている
今年も畑のすいかは元気に大きくなった
花は黄色で星みたい
つるをぐんぐんのぼして光合成

実には黒い波もよう
大きな葉のかげでしゅうかくをまっている
でもね本当はぼくすいかが苦手なんだ
すいかの水つぼくてたねがある所がいやなん
だ
毎年ひいおばあちゃんが大切に育てたすいか
ぼくはいつも食べていない
ひいおばあちゃんが育てたすいかは
どんな味だろう
ひいおばあちゃんの愛じょうがこもっている
のかなあ
今年も食べてみようかな
一口食べてみようかな
ひいおばあちゃんのえ顔を見たいから

心の中には いつまでもいるよ

新郷第一小学校 四年

平塚 大斗

「おっ 魚が入っている」
ザリガニとりをしていた小さな川
小さくてかわいいう魚
わくわくしながら
家につれて帰った

「なんていう魚かな」
気になって調べてみた
魚の名前はフナだとわかった
名前をつけてあげよう
「君の名は・・タナちゃん」
この日からタナちゃんは
家族になった

タナちゃんの好物は
蚊のよう虫だ
蚊のよう虫をあげると
すぐに泳いできて食べる
家族が元気でいることが

とてもうれしかった
ぼくはタナちゃんに言った
「これからも ずっといっしょだよ」

タナちゃんとすごして
二年がたった
今日もいつものように
タナちゃんにえさをあげてから
学校に行った

「ただいま」
タナちゃんが水そうにういている
ぼくの目から大きな涙が
ポトポト落ちた
家族みんなが悲しんだ
そして タナちゃんのおはかをつくった
「タナちゃん 今までありがとう」
ぼくの心の中には
タナちゃんがずっといる

あさがお

新郷第一小学校

一年

吉江

心

あさがおのはな

くろくて ちいさい
さんかくのたね
つちのなかに
たねをまいて
まいにち
おみずをピュッピュッ
あれ めがでてる
やっただ
きょうしつにいつて
せんせいに つたえよう
めがでて
つるがぐんぐんのびて
はっぱが
いちまい にまい
さんまい よんまい・・・
どんどんふえて
つぼみが ふくらんだら
ぱっとさいたよ

ぼくのやさしいおじいちゃん

手子林小学校 六年

渡部 涼平

ぼくは、おじいちゃんから書道を習っている。

おじいちゃんは、どんな字でもササッと書くのにとても上手に書く。

筆の入れ方や難しい漢字でもわかりやすく教えてくれる。

おじいちゃんに教えてもらう字は、難しいものもたくさんある。

難しい字はどうまく書けるか緊張する。

とんと置いてスウーと引いてちよんちよん

字の書き始めから終わりまで止め、ハネ、

はらい。

色々な所に、気を付けて書く。

半紙に書いてみる。

うまくいかない時は、くやしい。

もう一枚、もう一枚と書くけれど、うまくいかない日は、もう書きたくない。

でも、ぼくの手は止まらない。

とんと置いてスウーと引いてちよんちよん

ぼくの頭には、いつもこれが流れている。

ぼくのマ法の言葉だ。

おじいちゃんの字に追いつくように何度もくり返す。

次はもつとうまく書けるようにしたい。

その思いが通じて、うまくいくととてもうれしい。

完成した作品を見るとぼくの心が高鳴る。

これを見ると、また手が動き出す。